

## 童謡 〈シャボン玉〉:わが国におけるしゃぼん玉遊び その受容の歴史と文化の研究

Nursery Rhyme “*Shabon-dama (Soap Bubble)*”: a Study on ‘Blowing Bubbles’ in Japan from the Perspective of its History and Culture

宮田 知絵

Chie Miyata

For a profound appreciation of ‘blowing bubbles’, which is the theme of a nursery rhyme “*Shabon-dama (SoapBubble)*”, this paper studies the history and culture of its reception in Japan, with respect to the ‘act of washing’, ‘advent of soap’ and ‘spread’ thereof.

In addition, the paper refers to the presence of another nursery rhyme related to “*Shabon-dama*”, which neither academic circles nor music circles in the country have ever discussed.

### はじめに

子どもたちの歌唱活動に用いられる歌の中で、遊びを主題とした歌に「しゃぼんだま とんだやねまでとんだ やねまでとんで こわれてきえた かぜかぜふくな しゃぼんだまとぼそ」の歌詞で知られ、現在も人々に愛唱される童謡〈シャボン玉〉がある。この作品は野口雨情の詩に中山晋平が付曲し、大正12(1923)年に『童謡小曲:第三集』(中山晋平作品集)で発表された<sup>1</sup>作品である。この童謡の主題である「しゃぼん玉遊び」は、石鹼を溶かした水にストローの先を浸し、そのストローに息を吹き込んで、先端から広がり浮遊するしゃぼん玉を楽しむもので、今も多くの子どもたちが楽しむ遊びといえる。

さて、近年は教育のねらいにおいて、日本の伝統や文化を正しく伝えて行くこと、が掲げられている。一つの遊びを行う場面や歌をうたうだけの場面においても、それぞれについて日本の伝統や文化への深い理解を根底に持つことで、関心が深まり、行為を正しく理解し、大切にす気持も増幅し、それが心を込めた行動となることは当然のことと言えよう。特に歌唱においては、求められる“心を込めた表現”につながるうえに、学習者の興味に応じた楽曲指導の豊かな展開が可能となる。その観点から考えたとき、一つの歌の主題の歴史背景について、曲を取り扱う人々や教員養成課程で学ぶ学生等の理解は充分だろうか、と不安を感じることも少なくない。

そこで筆者は教員養成課程で学ぶ約110名程の学生に、歌の主題となる遊びの歴史に関する知識を問う簡易なアンケート調査を実施したことがあるが、しゃぼん玉遊びが江戸期からみられる古い歴史をもった遊びだと認識できていた学生は、わずか12%に過ぎなかった。このことから90%近い学生が明治以後の比較的新しい遊びだ、と誤った理解をしていることが分かる。

この現実を基礎として、教材となる本童謡作品の主題、その歴史背景の理解を深めるため、しゃぼん玉に関連する事項について、日本の古典籍、伝統的絵画、伝統芸能、近代文学、など広い領域に視線を向けた学際的な手法により論考することの必要性を知らされた。より広く深い知識に裏付けされた作品理解は、音楽の演奏にとって極めて重要な作品への畏敬、そこから出発する歌唱表現の豊かさに資すること大と考えるからである。またその論考の発展として、本論ではこれまで学界や楽壇で論じられたことがなく、新発見とも呼ぶべきしゃぼん玉を主題とした関連

\* 帝塚山大学 教育学部 准教授

童謡作品の存在について言及し、その概要を提示する。

### 1-1 洗うという行為

しゃぼん玉遊びは、衣服などを洗う、すなわち洗濯という人間生活に不可欠な作業の際に用いられる材料である石鹼を素材とした遊びであるが、洗う、洗濯する、と言う行為が記録されている日本での最古の文献としては『古事記』における雄略天皇(418-479)の項に記された一文がある。

天皇遊び行きて、美和河に到りし時に、河の辺に衣を洗ふ童女有り。其の容姿、甚麗し。天皇、其の童女に問ひしく、「汝は誰が子ぞ」とひき。答へて白ししく、「己が名は、引田部の赤猪子と謂ふ」とまをしき<sup>2</sup>。

これは、その折の天皇の言葉「汝は夫に嫁はずあれ、今喚してむ」そのままに、80歳を過ぎるまで待ち続けた乙女の涙さそう赤猪子説話の一部であるが、ここでの物語の背景は河の邊に衣を洗う少女の洗濯の描写である。また養老5(721)年に成立したと見なされている『常陸國風土記』<sup>3</sup>における那賀の郡の項目では

村ノ中浄泉アリ。俗ニ謂フ大井。夏冷ニ冬温。湧流成ル川。夏暑之時。遠邇郷里。酒肴齋糞。男女集會。休遊飲漿。(二十七) 當テ其以南泉出ツ坂中。水多ク流レ尤モ清シ謂フ之曝井ト。縁テ泉ニ所居。村落婦女。夏月會集。洗ヒ布ヲ曝乾。(二十四)

として、村の中に浄泉があり、それを大井と呼んだこと、その南には泉が湧いて、水が大変清らかであったこと。近隣の婦女が集まり、その辺りでは布を洗濯し曝して干す、それ故に地名が曝井となった、との記述を見出せる。これにより、この時代には洗濯の場があり、洗濯と言う行為、が日常の仕事になっていたことが読み解ける<sup>4</sup>。

### 1-2 石鹼の到来 その概略

そもそも「しゃぼん」の語源は、スペイン語の(xabon/Jabon)、ポルトガル語の(Sabão)などで<sup>5</sup>、その意は石鹼のことであるが、しゃぼん玉の材料となる石鹼(または、しゃぼん)という語を、日本ではいつ頃から見出せるのか。これについて音楽分野では、色々な著述物において「〇〇時代の頃…」と色々な時代を表記している物が見られる。しかしそれらはいずれもエビデンスの表記がなく、次々と引用され流布されているのが現状である。そこで確実な文献を辿ることで、この問題を整理したいと思う。

中曾根(2007)は、慶長元(1596)年に石田三成が、博多の豪商神谷宗旦から慶長伏見地震の見舞に贈られたシャボンに対して礼を述べた書状の存在を指摘する<sup>6</sup>。この書状に書かれた内容、出来事、ならびに元亀元(1570)年から明治元(1868)年までの長崎に入港した阿蘭陀甲比丹の記録などは、二次資料ながら寺本(1974)による文献<sup>7</sup>にも詳しい。またその後の文献として、慶長16(1611)年6月の出来事が記された、まとまった一次資料の存在は見逃せない。それは慶長時代の江戸を訪れ、江戸城に参内したセバスチャン・ビスカイノが慶長16(1611)年6月23日の出来事を書き残し、慶応年間にマドリッドで公刊された写本、外国文献『ビスカイノ金銀島探検報告』である<sup>8</sup>。そこでは「議長判士参議等並に書記官を訪問し、彼等に各緋羅紗硝子器及び石鹼を贈りたるに、喜んで之を受納せり」として、南蛮渡来の珍しい文物が徳川幕府の幕閣に贈られ、その中に石鹼が有ったこと、また応対した本多佐渡守正信も一度は辞したもの、「外国の大使にして當國に於て訴願も要求もなさざる者なるが故に友情好意及び平和を希望する印」としての意を理解し「大に満足して之を納めたり」と記録されている<sup>9</sup>。この文書はさらにビスカイノが同年7月、駿府の城に赴き「大使は陛下の書記官上野殿を訪問し羅紗硝子器石鹼其他の相當なる進物を呈せしが、書記官は大に感謝を表して之を受け、暫く留め置きたる後、彼

は進物を受納し新イスパニヤの価値ある物として珍重せり」<sup>10</sup>との記録を残している。すなわち一度目は江戸城にてやがて二代将軍となる徳川秀忠と配下の最有力武将の一人である本田正信に、次は家康の居た駿河に赴き、正信の息子であり同じく権勢をふるった本多上野介正純にも石鹼を贈っていることが解る。ただしビスカイノは正純が「而して彼は再び之を大使に贈るが故に之を使用せられんことを望むと言ひ、又彼は潔白且忠實に其職に盡し…王侯に仕ふる者に模範を示すものなり」と細やかな人物観察、出来事や心情を述べていることは、石鹼を通して歴史の表舞台に立ち会うようで誠に興味深い。なお、このビスカイノによる「徳川幕府への献上」に関わるくだりは、日本側の文献『大日本史料』の後水尾天皇の項にも記載が残されており、ここでは他に黄金の盃、金時計、珍奇なる装飾品なども贈られた、との記録を見出すことが出来る<sup>11</sup>。これら献上品としてわが国へ到来、出現を経て、しゃぼんがわが国に正式に輸入されるのは、小野(1975)によれば寛文12(1672)年であり、その5年後の延宝5(1677)年には江戸で初のしゃぼんを商う店が出現したと言う<sup>12</sup>。しかし石鹼は一般の人々が手に入れたり、使用することは到底考えられない貴重な南蛮渡来のものであったから、人々は洗濯や入浴にはその後も「糠袋」、または石鹼のように泡立ち、汚れを落とす成分のサポニンが含まれた無患子やサイカチの実、さらには灰、粘土、灰汁、ツバキの油粕、うどん粉、など多彩なものを地域や社会階層により用いるのが一般的であった。糠袋の使用については江戸期の庶民の生活を膨大な書量で書き記した天保3(1832)年頃成立の『江戸繁盛記』<sup>13</sup>での湯屋のくだりを例示しておこう。

暁湯沸き易く、熱きを訴へて児啼く。便ち板壁を鳴らして水と呼び、送り瀉がしむ。(中略) 紅柿粉妹、オサン婢を連れて、並びに伴公に就いて糠袋を買ふ。



図1 「御殿山」  
三代 歌川豊国

江戸期の湯屋(銭湯)は朝早く店を開き、その時分のお湯は大変熱く、子どもたちは驚いて泣く。たちまち板壁を叩いて冷たい水を入れさせる。そこに紅や白粉で化粧した娘たちから下女にいたるまでが入って来、番台で糠袋を買ってその身体を洗う。ここには江戸期の生活、生き生きとした湯屋の賑わい、がこまやかに綴られている。なお糠袋を使う婦人の姿は、浮世絵にも残されており、例示したもの(図1)は三代歌川豊国の「御殿山」と題された作品であるが、糠袋は石鹼の一般的な代用品の一つであったことが図像からも伺い知れる<sup>14</sup>。石鹼に関する記述としては、文政5(1822)年に江戸期

の有名な蘭学医、宇田川榛斎(玄真)が医学・薬物に関する『遠西醫方名物考』(図2)を著したが、その中で石鹼の製造法や薬品としての効能を詳述した点は看過できない。書中「本邦古來未ダ石鹼ヲ製セズ」と著している<sup>15</sup>ことから、文政5年には、石鹼はわが国で製造されておらず、それはまだまだ後であることを本文献は物語る。

また、江戸期の文化・文政・天保そして弘化にいたる世情や出来事、布告、事件などあらゆることを書き遺した膨大な歴史資料である『浮世の有様』<sup>16</sup>での弘化二(1845)年六月の記述、「長崎の状況」には、蘭船が入港したこと、その数多くの荷の一覧の中に「硝子器21箱」、「丸サボン1箱」、「サボン248箱」と、サボン(石鹼)が有ったことが記録されていることから、石鹼は明治維新を迎える20年ほど前でも、輸入に頼る南蛮渡来の特別な品であったことが十分に伺い知れる。



図2 遠西醫方名物

### 1-3 シャボン玉遊び

「シャボン玉」とはどんな遊びで、いつごろからこの遊びが行われていたのだろうか。本章ではわが国での「シャボン玉」遊びのはじまりや記録について歴史的文献による検証を行う。天保年間の書『嬉遊笑覧』<sup>17</sup>は当時の江戸の風俗に関する重要な資料であるが、その中に「今志やぼんとて、無患子・芋がら・煙草莖など焼たる粉を水に漬し竹の細き管に其汁を蘸て吹ば、玉飛て日に映じ五色に光てみゆ、件の玉を吹ことを水圏戯といふ」との記述を見ることが出来る。石鹼ではなく、その代用として無患子などが用いられていたことや、シャボン玉遊びは水圏戯とも呼ばれていた事も伺い知れる<sup>18</sup>。その天保年間には、「評判の玉やァ、大玉、小玉の吹き分けとござァい」との節回しで、ヨシの管でシャボン玉を吹き散らしながら面白おかしくやって来る玉屋の姿が見られ<sup>19</sup>、同じ天保年間の3(1832)年には、江戸の中村座において、シャボン玉の行商を題材化した「おどけ俄煮珠取」(作詞 二代目瀬川如臈、作曲 初代清元斎兵衛、振り付け 二代目藤間勘十郎、舞踊 二代目中村芝翫)という清元の所作事が上演された記録も見いだせる<sup>20</sup>。これは当時、子どもたちにシャボン玉が大人気であったことを示すが、以下はその謡言葉の書かれた部分、およびその現代訳の歌詞の一部である。加えてこの清元「おどけ俄煮珠取」の絵図にも、傘を持ち、シャボン玉を吹く若衆の姿(図3)を見ることが出来る。また天保8(1837)年から嘉永6(1853)年までの歳月をかけて著された喜田川守貞刊による『類聚近世風俗志』には、「さぼん玉賣」の名称で、江戸、大阪でシャボン玉の商いをする様子が次のように記述されている<sup>21</sup>。

**おどけ俄煮珠取(玉屋)**

「さあさあ寄つたり見たり、吹いたり評判の、玉や玉や、商小品は八百八町、毎日ひにちお手あそび、子ども衆よせて辻々で、お目に懸値のない代物を、お求めなされと、たどり来る。

今度仕出しちやなけれども、お子様方のおなぐさみ、御存知しられた、玉ぐすり、鉄砲玉とは事替り、当つて怪我のないお土産で、曲はさまさま大玉、小玉、吹分けは、その日その日の風次第、まず玉尽しで言は……」

「三都とも夏月専ら賣之大坂は、特に土神祭祇の日専ら賣來る小兒の弄物也さぼん粉を水に侵し細管を以て吹之時に泡を生ず 京坂は詞



図3 清元おどけ俄煮珠取

に「ふき玉やさぼん玉吹は五色の玉が出る云々江戸は詞に「玉や玉や玉や」。ここでも、玉や、玉や、と声をあげる部分は共通しており、この呼び掛け声が江戸や大阪でも聞かれたことを物語る。さらに、江戸時代の同時期である寛永5(1852)年、風俗研究者でもあった鎌倉屋十兵衛(号、石塚豊芥子)によって著された『近世商賈尽狂歌合』にも、同じく「評判の玉や、玉や」の売り声と、「享保年中古版の双六」に描かれている旨の記載を見ることが出来るので、享保時代(1716~36)あたりからシャボン玉売り(志や盆賣)が市中に見られたことは一次資料で確認できる<sup>22</sup>。



図4 諸職画譜での石鹼行

さらに安政6(1859)年に刊行された『諸職画譜』では「石鹼行」と記され、シャボン玉売りの行商人のいで立ちが石鹼行の名とともに簡潔な図(図4)で残されているので<sup>23</sup>、シャボン玉売り(玉や)の行商は享保から安政へと100年以上にわたり、広く行われていたことをこれらの古資料は伝えてくれる。

### 1-4 画像として残されたシャボン玉 そこから伺えるものへの考察 浮世絵

庶民に近い位置での江戸時代の絵画と言えは浮世であるが、「シャボン玉」はその浮世絵の中

でも描かれて来た。通常浮世絵は木版での大量生産による絵画で、その時代に流行した風俗、世相、町人の興味を映しており、大名屋敷や寺院の襖絵、天井画などに描かれた絵画とは別目的を宿していた。浮世絵はまさに庶民の生活に密着した主題を持った絵画と言える。「うきよ」という言葉に内在する源を考えると、庶民の生きる現実の世界は、浄土・極楽と比較して、穢土・苦の世とみなす「うきよ=憂世」ととらえる仏教的思想の定着とともに使われるようになっていたことがあげられよう。また一方では「浮世」という言葉が象徴するように、心の弾む浮き浮きした歓楽の「浮世」へとその意が展開し移り変わったものでもある。すなわち「うきよ」は、苦しみの多い現世としての「憂世」、もう一つは、歓楽と浮き沈みのある現実の今様である「浮世」という二つの意味を併せ持った語としての意を宿していたのである。



図5 風流子供遊十月  
石川豊雅

浮世絵の主題としては、役者絵、美人画、風景画、などが有名であるが、子どもの姿を題材にした[子ども絵]も描かれていた。その中で、しゃぼん玉に興ずる子どもを描いた作品としては、[年中行事絵]に分類される石川豊雅の[風流子供遊十二月](江戸・明和期 1764年～1771年頃作)の連作の中に、生き活きとしたしゃぼん玉遊びの姿が描かれている(図5)。しかし豊雅は、それを十月のテーマとして扱っていることに留意しておきたい。しゃぼん玉を売り歩く「玉屋」の商いは江戸の夏の風物であったこと、俳諧ではしゃぼん玉が春の季語であること、これらとの不一致を考えると、豊雅が「風流十二月」の連作でしゃぼん玉遊びを十月のテーマとして描いたのは、十月に開かれる新嘗祭、恵比寿講などの祭りの華やぎ感が関係

していると考えられる。そのことは図5の描画において、上部に恵比寿を祀る婦人の姿が置かれていることによっても示唆される。しゃぼん玉遊びを取りあげた図像ではこの作例の他に、鈴木春信(図6)が描いた背景の梅が示す春の季節性にも留意しておきたい。その他では葛飾北斎、



図6 しゃぼん吹きと美人図  
鈴木春信

山寺北雅、磯田湖龍斎、歌川芳藤などの作品にもしゃぼん玉の図像が見られる。浮世絵に描かれたテーマは、多くの庶民が欲し、購入者が喜ぶテーマである必要を持っていたことから、しゃぼん玉が江戸時代の人々にとっていかに魅力があり、関心を集めたものであったかを、浮世絵は現代の私たちに伝えてくれる。しゃぼん玉の浮かぶ空間は、まさに浮世の「浮き」の感覚を表しており、これらは現れたり消えたりする、蛍、花火などとともに、はかなくうつろいやすいものという点で、共通性を持っているのである。北山(2005)は、浮世絵に描かれたしゃぼん玉について親子で遊ぶ母子関係の視点からも、しゃぼん玉が直ぐに壊れて消える現象から、「不安定に浮かんでいるものを媒体にして、母子の幻想的一体感が段階的に幻滅

していくところであり、(中略)どこか本質的でない「浮世」であることを意外と早くから母子関係の中で体得している」とし、「今日も私たちは、桜を愛で、蛍を追いかけて、浮かんでは消えるはかない対象を皆と眺めながら、命のはかなさをうたい、分離の痛みを共同して嘆こうとしている」<sup>24</sup>と、はかなく消えゆく対象を眺め楽しむと同時に、悲しみを抱く日本人の文化を指摘する。また、藤井(2004)は江戸時代のしゃぼん玉の流行について、大人の遊女の中で流行り始めることと、性的な営み、官能との関連、に言及している<sup>25</sup>。これらの研究による文化としての複合的な視野に留意しつつも、しゃぼん玉遊びは江戸時代の子どもたちにとっては、春の気候の

心地よさや、夏の暑さをやわらげる効果、そして祭り時の高揚感など、一年の各季節を通じて楽しめる特別な遊びであったことが、浮世絵から読み取れるのは確かなことであろう。

## 2-1 名作文学に描かれるしゃぼん そこから読み取れるもの

ここで、明治期の石鹸について、その実情を今の我々に伝えてくれる文学作品にも視線を投げかけておこう。島崎藤村は『夜明け前』<sup>26</sup>の中で維新时期から明治期の人々の暮らしを描写したが、本作品は「比較的史実に寄り添った歴史小節」<sup>27</sup>であり、そこに描かれる何気ない会話の中には、石鹸が当時の人々にどのように認識されていたかを読み解く鍵がある。書中の第六章、藤村は、横浜土産を置いて行った人があると言って、お民に見せる場面を描いている<sup>28</sup>。(下線は筆者)

「これだよ。これはお洗濯する時に使ふものださうなが、使ひ方はこれを呉れた人にもよく分らない。あんまり美しいものだから、横濱の異人屋敷から買って来たと言って、飯田の商人が土産に置いて行ったよ。」  
石鹸といふ言葉もまだなかったほどの時だ。呉れる飯田の商人も、貰ふ妻帯のおばあさんも、シャボンといふ名さえ知らなかった。(中略) お民がその白い方を女の兒の鼻の先へ持って行くと、お衆はそれを奪ひ取るやうにして、いきなり自分の口のところへ持って行かうとした。「これは食べるものぢゃないよ。」とお民はあわてて、娘の手を放させた。

続いて話は、お民がその不思議なものを鍋の中で煮る。すると溶けてすっかり泡になり、気味が悪くなったお民は、鍋ぐるみ土の中に埋めて、お洗濯するものじゃないのかと考える。

この一節は、作品中では神葬祭行事<sup>29</sup>の記述と相前後しているので、明治元年の頃の描写と考えられる。藤村のこの名作からも明治初期には、石鹸、シャボン、と言う言葉は殆ど一般に知られていなかったことを作品が伝えてくれる。ここまで長編『夜明け前』の一部分を抽出したが、この作品は1934年に新協劇団によって第一部が、1936年には第二部が、東京・大阪、名古屋にて村山知義の脚色により舞台に懸けられている。奇しくもその脚色台本<sup>30</sup>を入手できたので、つぶさに見たところ、元の膨大な原作長編の中から、石鹸のくだりは文言と表現語句を変えてはいるものの、削除されることなく台本の中で以下のように採用されている。

お里 これですよ。これは異人がお洗濯をする時に使ふのださうですが、宮川先生にもその使ひ方はよく解らないのださうです。ただあんまり綺麗だからと云ってね。

お民 (手にとって) まあ、いいにほひだこと。

半蔵 ふうん、不思議なにほひだな。異人のものはにほひまでまるで別だ。

お民 …略… 食べるものじゃないよ。ただにほひをかぐだけだよ。…略…

お里 なんでも水に溶かすのだっていふので、わたし一つ煮てみましたよ。ところがこれがぐるぐる鍋の中で廻って溶けてしまったんですよ。(中略) 何だか私気味が悪くなったから、鍋ぐるみ土の中に埋めさせてしまひましたよ<sup>31</sup>。

この脚本台本の中に、『演出おぼえ書き』を書き留めた久保榮の、「脚色者に與へられた課題は、この原作のリアリズムに反映する、すぐれた歴史的諸事実について、その素材と主題と表現とのあひだの相關関係を、新たに批判的に再構築して、學びとるべきものには飽くまで謙虚であると同時に、さらに掘り下げなければならないものには、飽くまで意欲的であること」と言う言葉<sup>32</sup>を読み落とさなければ、このシーンは、時代背景を構成する上で重要な部分であると判じられた結果の採用であり、明治初期の人々の暮らし向き、人々の心の姿、それらを石鹸と言うモノを介在させて表出しようとしたことを十二分に伝える1景として受け止めることができよう。また石鹸が人々と親しい存在になるまでの歳月を、文学的な豊饒さで描いた箇所といえる。

## 2-2 明治以後のしゃぼん玉遊びの位置

石鹼が人々の生活に取り入れられるようになってから、しゃぼん玉液は子どもたちの手作りで、実験遊びの様に楽しんで作られた。塚本は「それは大正時代になってからのこと」で「石鹼が手に入る以前はムクロジ（無患子）の実や、そこに工夫として松脂などを加えた」<sup>33</sup>と記している。現代の子どもたちには、ムクロジ（無患子）の実そのものが、ほぼ理解出来ないと思うので、お正月につく「羽根つき」の羽根、その頭の黒い玉、これはムクロジの実で作られるのが伝統であることを併せて知らせておきたい。大正期に入ると、子どもたちは石鹼を水で溶かした液を茶碗や瓶に入れ、ムギわらなどの細い管につけて吹くようになる。春の天気の良い日には、子どもたちがしゃぼん玉を作って遊ぶ姿が見られる<sup>34</sup>ようになるが、この時代は折しも明治期の官製の唱歌に対し『赤い鳥』を代表とする童謡運動が展開されたことと相まって、大正12(1923)年に野口雨情:詩、中山晋平:曲により発表された〈シャボン玉〉の歌<sup>35</sup>は、全国の子どもたちに歌われるようになったのである。当時の世相を「昭和のはじめころには、ガラス管に入ったものが一本一銭で出回った」と齊藤は記している<sup>36</sup>。

子どもの遊びについての名著『童遊文化史全五巻』を纏めた半澤<sup>37</sup>は、子どもの遊びを明治前期/中期/後期、大正前期/後期、昭和期ⅠⅡⅢ、と時代別に調査した<sup>38</sup>。そこで取り上げられた遊び全4,414種の中で、頻度上位60種の中に、「しゃぼん玉遊び」は明治期（全期）の夏の遊びとして男児で49位、女児で55位に登場している。大正期ではやはり夏の遊びとして男児では30位、女児は41位と順位を上げ登場する。昭和期では、男児31位、女児19位となり、全体的に見てさらに順位を上げ、子どもたちの遊びとしてしゃぼん玉遊びは愛好されたことが解かる。

昔のしゃぼん玉は、植物や洗濯石鹼から素材を取り作られていたので、発色も微かで、壊れやすく、大きく膨らます事は困難だった。しかし子どもたちは、しゃぼん玉を手作りする過程を楽しみ、大人の知恵を借り、丈夫で色艶を良くするための工夫をした。膨れてはすぐに壊れてしまうしゃぼん玉ゆえに、夢さと共に吹き方や一回一回の工夫が生きるものであり、それが子どもたちの心をときめかせたのである。

## 3 童謡〈シャボン玉〉の成立と、新たな作品の発見について

童謡〈シャボン玉〉と言えば、雨情/晋平により大正12年に作られた作品を一般的には指す。しかしこの作品が発表される以前にも、「しゃぼん玉」と言う標題を持つ曲が存在した。それは明治29年の『新編教育唱歌 第2集 32』において発表された〈しゃぼん玉（作詞/作曲者、ともに不明）〉と、大正4年の『大正幼年唱歌 第2集』での〈しゃぼん玉（葛原しげる:作詞、梁田貞:作曲）〉であり、これら3作品における歌詞や音楽の比較は拙著において論考・発表した<sup>39</sup>。

本稿では、その後となる大正15年の『検定唱歌集』に収められた〈しゃぼん玉（蘆田恵之助:作詞、田村虎蔵:作曲）〉の存在にも言及しておこう。この作品は第一学年の第二学期に学ぶ歌として、すなわち秋の季節の教材として所載されており、かつ教師用の指導書たる『検定唱歌集 尋常科用』では、しゃぼん＝スペイン語であること、愉快的な聲で歌はせること、などが付記されている<sup>40</sup>。次に本論では、ここまで述べて来た江戸期のしゃぼん玉、すなわち「玉や」と呼ばれた言葉が、童謡の中に残されている作品が存在することを新たに示したい。それは林柳波:作詞、本居長世:作曲による作品で、標題も〈玉や〉と題された作品である。この語句は江戸期ではしゃぼん玉と同じ意味を有するので、この作品も「しゃぼん玉」の歌として検証する必要がある。しかし江戸期の呼称「玉や」という語句への理解が現在ではすでに一般的でなく、それゆえに、この作品に対する研究は学界で見落とされてきた。この作品をまぼろしの作品と位置付ける

もう一つの理由は、本居長世に関するまとまった書籍『本居長世 日本童謡先駆者の生涯』<sup>41</sup>にも、また芸術選奨・文部大臣賞を受けた書籍である『十五夜お月さん 本居長世 人と作品』<sup>42</sup>などでの曲名索引一覧にも、本曲の記述は欠落しており見当たらず、付編としての年譜中の昭和5年欄に「玉屋」の記述が見られるのみである。またこれまで学会や大学紀要などの論考で取り上げられた記録はない、と思われる点などからである。

玉の玉は 大玉 小玉  
 管吹くたびに フワフワとんで  
 クルクルまはる  
 玉やは日傘 空色 頭巾  
 玉箱胸に 大玉 小玉  
 吹くたびとぶよ  
 玉の玉は 天神様の  
 鳥居を越えて  
 どこまで 上る  
 大玉 小玉  
 大玉ふわり 小玉もふわり  
 虹色光れ  
 消えずに光れ  
 天まで 上れ

この作品を筆者は、非売品であった全集楽譜<sup>43</sup>の中において発見したものであるが、それは金箔を施された豪華で重厚な書籍で、現在では限られた大学図書館の蔵書においてのみ目にすることができる。幸いにも筆者の所蔵に在り、全150作品の中の第50曲目として今回発見することが出来た。歌詞の内容を見ると、まさに江戸期に商われた「玉屋」の行

商の様子、頭巾／玉箱／天神様（祭礼時などに多く行商された）が読み込まれているのである。本作品の成立年代の特定は、現時点では確実なエビデンスを得られるまでに至っていないが、前述した金田一による著作での長世の年譜、昭和5年の作品項に「玉屋」と記されていることを留意しておきたい。さて日清戦争が開戦した明治27（1894）年刊の『風俗畫報/第七十九號』には、しゃぼん玉売りの図が見られるが、そこでは「江戸市中世渡り種」の一つとして「玉屋」を上げ、昔は売り声が賑やかだった玉屋の行商人の姿が、この時期（明治27年）には見られなくなった、と記述されている<sup>44</sup>。本居と林による〈玉や〉の歌の成立年代は、最も古く考えても林柳波と仕事の関りを持った大正期末以後とすれば、これに相反する『風俗畫報』での記述から、この童謡作品〈玉や〉は、別の視点から大きな意味を我々に提示してくれる。すなわち、明治25（1892）年の生まれである作詞者、林柳波は、彼の育った明治末期から、作品発表の作品発表年と見なされる昭和5年までのまでのどこかで、玉屋（しゃぼん玉売り）の語彙を知っていたか、行商姿を目にしただろうこと、故に地方では、まだまだ玉屋の行商は続いていた、と考えられる点である。

石鹼が一般的に普及していなければ、玉屋の行商は成立すると考えられるが、藤本が行った明治生まれの人々に対する綿密な聞き取り調査<sup>45</sup>の中でも、明治40年頃の大阪、京都の市井の人々の間では「石鹼などまだ無かった、その代わりに糠袋が使われていた」ことが語られている。

ここまで、しゃぼん玉を曲の標題に、または歌の主題として持つ作品について、昭和5年頃までの作品について論考した。その後、現在まで「しゃぼん玉の歌」は新たに作られ続け、少なくとも20曲以上の作品が送り出されている。ここで、雨情・晋平の童謡〈しゃぼん玉〉の曲に論



図7 中山晋平 童謡小曲 第3集

点を戻すが、この作品が初出した初版楽譜『中山晋平童謡小曲第3集』<sup>46</sup>の表紙では、しゃぼん玉遊びの様子が、加藤まさをの挿画（図7）により描かれている。この図では男女児の二人が仲良く並んで座り、ともに日本の着物の上に洋風の白いエプロンを着る、と言う大正時代に流行った子どもたちの服装をしている。二人は赤い椿の花の咲く垣根の下で、ふわふわと宙に浮かぶしゃぼん玉をうっとり眺めている。この図に描かれた子どもの表情は、それまでの明治期末の唱歌に描かれた子どもの服装や表情とは大きく異なる<sup>47</sup>。ここでの子どもたちは、ゆったりと外遊びを楽しむ長閑で平和な風景であり、大正ロマンを彷彿とさせる。この挿図では特に背景に椿の花が描かれている

ことに着目したい。描かれている椿は、古い歴史を持つ日本の花木で、春に花を咲かせることから、奈良時代末期頃（764年～794年）から「木」と「春」を組み合わせた「椿」が国字として使われていた。また、江戸時代には、品種改良が盛んに行われ、既に多くの品種が存在していた。俳句の季語では、春、三春（春全般を指す）、に使われる。よって図7に描かれたしゃぼん玉と椿から、しゃぼん玉遊びで連想された季節は春であることが読み取れ、挿画を手掛けた加藤まさをはこれらの伝承知識を持っていた可能性が考えられる。

## さいごに

現代のしゃぼん玉遊びの状況を見ると、化学製品によるゴージャスでカラフル、割れにくく強いしゃぼん玉液が玩具店では売られている。またしゃぼん玉遊びのための玩具の種類も多彩である。このようにお金と交換で、簡単に手に入るものとなったが、その代償として親子で作る絆や、おもちゃを作るときめき・工夫などの世界は後退した。しかし、しゃぼん玉の儚さは薄れても、その本質は命を保っているといえる。現在でも多くの保育の場で雨情・晋平による〈シャボン玉〉の歌は愛唱されており<sup>48</sup>この傾向は今後も長く続くと考えられるが、しゃぼん玉遊びの遊びとしての本質や、この遊びがどれほど時代的に長い歴史を持っているのか、などについては年ごとに逆に忘却の色を増していくことが想像される。しゃぼん玉遊びの持つ歴史への研究、そしや理解が今後も深まり、本曲も伝えられていくことを願っている。

## 注

1. 本曲は大正12(1923)年に中山晋平の作品集『童謡小曲/第三集』で発表されたが、雨情による詩そのものは、その前年の大正11(1922)年に仏教系の児童雑誌『金の塔』で初出している。
2. 山口佳紀/神野志貴光:校注『新編日本古典文学全集1 古事記』小学館、1997.p.341.なお、烏谷知子『『古事記』雄略天皇条の構成』、『学苑・日本文学紀要 第891号』、2015.pp.1-16.では本文に記した赤猪子求婚譚をはじめ、歳の支配を受けない天皇の永遠性などが、精緻に論述されている。
3. 『常陸國風土記』は和同6(713)年の奈良時代から編纂が始まり、養老5(721)年に成立した地誌であり、風土記では、常陸国、播磨国、肥前国、豊後国、出雲国の5冊が現存している。常陸国は現在の茨城県。
4. 西野宣明:校注『常陸國風土記』和泉屋金右衛門:版、天保10(1839)、国立国会図書館、839-70. 第32.
5. 林田明『南蛮語拾遺』『千葉大学人文学部/語文論叢8』1980. p.7.
6. 中曾根弓夫「石鹼・合成洗剤の技術発展の系統化調査」『国立科学博物館技術の系統化調査報告 Vol.9 2007』、国立科学博物館、2007. p.5. 中曾根は東京大学史料編纂所の所蔵する神谷文書を図とともに例示。本研究では人類が用いた初期の石鹼、その後の洗剤工業の発展など、精緻な論考が記されている。
7. 寺本界雄『長崎本一南蛮紅毛事典』形象社、1974. p.96. 索引、X1-XV1.
8. Sebastian Vizcaino「Coleccion de Documentos Ineditos relativos al descubrimiento,」Biblioteca Nacional,J-37. 写本。セバスチャン・ビスカイノはイスパニアに生まれ、世界の各地を探検。慶長16(1611)年6月に来日、その後金銀島探検を経て11月に再び来日。「フィリピン諸島及び日本の戦争の書翰の第二章に掲げたる金銀に富みたる島々の探検の航海に付、セバスチャン・ビスカイノが新イスパニア総督に送りたる報告の謄本」と題され、慶応3(1867)年にマドリッドで公刊された詳細な文書。
9. 村上直次郎:訳注『ドン・ロドリゴ日本見聞録/ビスカイノ金銀島探検報告』、雄松堂書店、異国叢書復刻版、昭和45.改定復刻版第二刷、pp.49-50.なお本文での日付は同書による。
10. 村上直次郎、同上書、p.66.同上、本文での日付は同書による。
11. 東京大学史料編纂所『大日本史料 第十二編之八』、東京大学出版会、明治19.版/復刻。pp.532-538.
12. 小野武雄『江戸の舶来風俗志』展望社、昭和50.p.329. 小野は帝京大学図書館長をつとめ、本書においては、時計・羅紗・コーヒー・その他の物品の到来や、阿蘭陀人来貢などについての紹介をまとめている。
13. 寺門静軒『江戸繁昌記』、参照:校注:日野龍夫、『新日本古典文学大系100 江戸繁盛記』岩波書店、1993. p.73. pp.586-587.静軒の本名は寺角良、通称弥五左衛門、名は子温で水戸藩士。寛政8(1796)年生まれ。

- 本書はすべて漢文による膨大な著述で全5篇よりなる。おおよその執筆期間を日野は天保3年から7年と推定している。その第二篇、混堂の章では江戸期の入浴、銭湯の様子が細やかに記載されている。
14. 三代歌川豊国、天明6(1786)-元治元(1864)。本作は安政5(1858)年のもの。江戸名所百人美女 御殿山 [https://edo-g.com/blog/2016/02/sekken.html/sekken1\\_1](https://edo-g.com/blog/2016/02/sekken.html/sekken1_1)
  15. 宇田川榛斎『遠西醫方名物考』、風雲堂蔵版、文政5(1822)年刊、滋賀医科大学所蔵版、宇田川(1769～1834)は江戸期の著名な蘭学者。本書は全36巻に及ぶまとまった文献で、その30巻に石鹼の製造法、薬としての効能とともに「各國製法を異ニシ□油ノ性分量配合ノ多少同ジカラザル故ニ其品亦一様ナラズ」と記されている。
  16. 作者不詳『浮世の有様』、本古典籍は国立国会図書館所蔵本を底本として、大正年間の『國史叢書』を経て、完全翻刻は1970年に谷川健一編『日本庶民生活資料集成：/第十一巻・世相一』、として三一書房より行われた。同書のpp.990-992.
  17. 近藤圭造校訂/喜多村信節撰『嬉遊笑覧』上巻、名著刊行会、昭和45.p.417.著者の喜多村信節は、またの名を信節、号は筠庭とも称する。発行年は原著では文政13年庚寅冬十月と記載されているが、同年は天保元年にもあたるため、天保元年と記載される場合もある。
  18. 喜多村筠庭『嬉遊笑覧(二)』、岩波書店、2004.pp.230.-231。「今志やばんとて、無患子・芋がら・煙草莖など焼たる粉を水に漬し竹の細き菅に其汁を蘸て吹ば、玉飛て日に映じ五色に光てみゆ。件の玉を吹ことを水圏戯といふ。『物理小職』に出たり膿、嚙水入松香末、浸小蔑圈揮之大小成毬飛去。劉若愚言、嘉宗能戲以水抛空中成团」とある。本書は別名、喜田川守貞『守貞漫稿』、嘉永6(1853).巻三。
  19. 斎藤良輔『日本のおもちゃうた』朝日新聞社、昭和47.p.34
  20. 日本名著全集『江戸文藝之部第二十八巻歌謡音楽集』、昭和4.p.610-621.『清元の志保里』国立国会図書館近代デジタルライブラリー、c.64-65.清元同好会『清元の志を里』日吉堂、大正13. pp.61-63.
  21. 喜田川守貞『類聚近世風俗志』、室松岩雄編、榎本書房、明治41.(版復刻、昭和2.) p.160-161.
  22. 石塚豊芥子『近世商賈尽歌合付録(狂歌合)』国立国会図書館、000007283364 NDL画像36コマ、著者の豊芥子は、通名が鎌倉屋十(重)兵衛
  23. 北尾蕙斎『諸職画譜』須原屋市兵衛版、和本、寛政6(1794)、国立国会図書館、000007297850. 本名、北尾政美、別名、鋏形蕙斎。諸職画譜は江戸期の色々な職業の仕事の折の姿や、庶民も含めた暮らしの姿が数多く描かれ、現代における画帳の手本としての働きを持つ。
  24. 北山修『共視論』講談社、2005.pp.23 - 25.p. 115. 江戸期の大衆芸術としてあった浮世絵に関しては、作者独自の内なるモチーフや創作欲求といったもの以上に、それを買い求め、見ようとする鑑賞者の視点や欲求を考慮することが大切であった、とする。
  25. 藤井康生「バロックと歌舞伎」『関西外国語大学 研究論集 第79号』2004.pp.131-144.「バロックと歌舞伎」を論じる中で、「シャボン玉」の宗教性とバロック演劇について言及し、その文脈の中で、浮世絵の画像を論じている。
  26. 『日本現代文学全集20:島崎藤村(二)』講談社、昭和55.本作品は昭和4年4月から、年4回の割で『中央公論』に発表され、昭和10年に6年の歳月を経て二部・四巻に完結した長編作品。
  27. 滝藤満義『島崎藤村:夜明け前/第一部上』注解、新潮文庫、平成30. p.418.
  28. 伊藤整/他編『日本現代文学全集20:島崎藤村(二)』講談社、昭和55. pp.97-98.
  29. 同上書、p.96.神葬祭は神道による葬儀式の許可に関わる事項。幕末の復古運動で神道による葬儀式が唱えられ、幕府の寺社奉行、寺院、神社の間で可否が難航。明治元年に神道での葬祭が認められた。
  30. 村山知義脚色、島崎藤村原作『夜明け前』テアトロ社、昭和13.
  31. 村山知義脚色、同上書、テアトロ社、昭和13. pp.57-58.
  32. 九保榮「演出おぼえ書」『村山知義脚色、島崎藤村原作、夜明け前』テアトロ社、昭和13. p.225.
  33. 塚本判治『竹馬 明治の子どもの遊び』福祉新聞社、昭和42.pp.180-182.
  34. 茨城民俗学会編『子どもの歳時と遊び』第一法規出版社、昭和45. p.274.
  35. 上笙一郎の解説による『日本童謡事典』東京堂出版、pp.190-191.では、先に発表された雨情の詩では「しゃぼん玉」、後の晋平による歌では「シャボン玉」と(平仮名から片仮名表記に)なっているが、この遊びを雨情は日本のもの、晋平は外国渡りのもの、と受け取っていたことを示唆する、と解している。
  36. 斎藤良輔『日本のおもちゃ遊び』朝日新聞社、昭和47. p.37.「東京あたりの玩具屋ではこれを地方に送り出すとき、100本ごとにモミガラで包み、肝心のガラス管がこわれぬよう細心の注意をしたものだ。」
  37. 半澤敏郎『童遊文化史 全五巻』東京書籍、昭和55.pp.238-239.半澤は江戸期の伝承遊び、外来文化の渡来、文明開化、の経緯により「遊びの世界にも維新の高波が打ち寄せた」と総括しつつ、4,414種の遊びに対しての考察を行った。
  38. 半澤敏郎『童遊文化史全五巻』第三巻、東京書籍、昭和55.ここでの時代区分は、明治前期(明治元～15

- 年)、同中期(明治16～30年)、同後期(明治21～45年)、大正前期(大正元～10年)、同後期(大正11～15年)、昭和はⅠ期(昭和元～10年)、Ⅱ期(昭和1年～20年)、Ⅲ期(昭和21～48年)と分類した調査。
39. 宮田知絵「野口雨情:詩/中山晋平:曲の〈シャボン玉〉、その作品研究」、『関西楽理研究Vol.30』関西楽理研究会、2013. pp.186-197.
  40. 田村虎蔵『検定唱歌集 尋常科用』松邑三松堂、大正15. p.19.および緒言の四。同書の緒言において、田村は「教師用として」編成していること、また「餘白の部分には、余の多年實地経験上から得た教授の注意並歌曲の解説等を附記して置いた」と記している。
  41. 松浦良代『本居長世 日本童謡先駆者の生涯』国書刊行会、平成17.
  42. 金田一春彦『十五夜お月さん 本居長世 人と作品』三省堂、1983. 同書において「玉・玉・シャボン玉」と言うタイトルでの高田三九三の詩による作品は記載されているが、同曲は当時の出版社であった「しゃぼん玉社の社歌」であり、これはしゃぼん玉遊びの歌ではない。昭和9年の作。p.311.を参照のこと。
  43. 本居長世:編『世界音楽全集第17巻』春秋社、非売品、昭和5. p.67. 第50番の曲。(歌詞はp.236.に掲載)。しかし曲番号は随所にズレが見られ、本曲は歌詞頁では54番の曲と誤印字されている。
  44. 『風俗畫報』第七十九號、東陽堂、明治27、p.18-19. (復刻版/国書刊行会、昭和48.)、「玉屋は口元に愛嬌ありて玉は丸きに興ぞあるべき囁昔賣聲の喧ましかりしが今は見えずなりける」とある。
  45. 藤本浩之輔『聞き書き 明治の子ども 遊びと暮らし』本邦書籍、昭和61. pp.127-128.
  46. 『中山晋平童謡小曲第3集』、山野楽器店、大正12.
  47. 一例を引けば、明治45年から大正期初年度にかけて発行された吉丸一昌による『幼年唱歌第一集』の表紙絵(筆者蔵)での男児は、詰襟姿をした軍服調で描かれている。
  48. 村上沙樹・鈴木慎一郎「鳥取市立保育所における童謡に関する質問紙調査」『教育研究論集 第8号』2018.pp.88-89.鳥取市立保育所での保育者が扱った童謡の上位2位にシャボン玉の歌は位置し、87パーセントの園で愛唱されていることが報告されている。